

第四章 学問と野心

四国は西讀の片田舎の少年にとって、東京への遊学は、現在の学生たちにとってのアメリカ留学よりも遙かに大きな夢であったにちがいない。東京は憧れの都であり、世界への窓であった。正芳は高松高商入学以来、何度か訪れたこの都市の活力と可能性に魅せられて、親しい友人に「東京は生き甲斐のあるまちだ」と語っていたが、いまその夢が満たされ、東京の住人の一人となった。昭和八年（一九三三年）、正芳二十三歳の春のことである。

正芳は、大学入学後、東京商科大学（現一橋大学）の所在する国立に近い府下国分寺に下宿した。人の紹介で近くの家の中学生に英語を教えた。二つの奨学資金とアルバイトからの収入、そして、時には、故郷の兄からの送金があった。決して楽とは言えなかったが、学生としての生活基盤はほぼこれで固まった。

「一ツ橋はすでに、都心の神田から国立に、予科は石神井から小平に移転していた。そのころの武蔵野には、国木田独歩の作品にみるようなおもかげが、なお色濃く残っており、武蔵野と「商科大学」との組み合わせには、ややちぐはぐなものがあった。

講義の半ばで、芋掘りに出かけたことも再三あったし、秋から冬にかけては、落葉の散りしきるキャンパスの周辺は、ことのほか寂しかった。それに、映画をみるには新宿まで出かけなければならなかったし、古

本をあさるには神田へ行かねばならず、ボートをこぐには隅田川というふうに、往復の電車賃さえとばしい学生のふところには、相当こたえたものである」。

東京商科大学の濫觴は、明治八年（一八七五年）、森有礼（文部大臣）によって創立された商法講習所にあるとされ、同校はわが国の近代化に大きな役割を果たしてきた。

だが、その歴史は、決して坦々としたものではなかった。明治十八年に文部省所管の国立校となるまでは、その所管が次々と変化し、一度は経営難のため廃校の決議が行われたこともあった。国立移管後も数回の危機があり、一橋は全校をあげてこれを持ち切ってきた。その危機の一つは、正芳の入学する二年前にも生じた。若槻礼次郎民政党内閣の緊縮政策によって伝統のある予科と専門部が廃止されようとしたのである。学生はこれに強く抵抗し、最後の手段として籠城戦術に訴え、これを弾圧する警官との間に乱闘が行われて負傷者多数を出したが、先輩などの工作により政府が方針を撤回した。

さらに、昭和八年の一月、正芳が入学する直前には、マルクス経済学の泰斗、大塚金之助教授が第五次共産党事件連座の嫌疑により、警視庁特高課員に逮捕された。シンパに過ぎなかった学生も検挙されて退学処分を受け、唯物論研究会の少壮教授の中からも検束されるものが出るという有様だった。

当時の友人の言によれば、「昭和八年から十一年にかけては、激動と混乱の時期で、学生は勉強を一生懸命やるグループと、もっぱら遊ぶグループの二つに分かれた」。正芳は、おそらく前者だったのであろう。

「必修科目のほか、私は杉村広蔵先生の経済哲学、山内得立先生の哲学史、三浦新七先生の文明史、牧野英一先生の法律思想史など、手当たり次第に、欲張って受講することにした。私にとっては、いずれもが難解であったが、受講したおかげで、思想史、とりわけ経済の思想史に若干の興味を覚えるようになった」。

大平は後年（昭和三十八年）、杉村教授への追想文を草したが、その中に、次のように書いている。

「（杉村先生の）資本主義と社会主義に対する見方、貨幣に対する考え方、生産と貯蓄と投資の機能とその

限界、経済性の理念の指向するもの、ひいてはその前提にうかがふ文化価値というもの等々の精神と構造への理解に接近することができたことは大きな開眼であったと思いますが、更には歴史に対する考え方、人生のモチープに対する反省というようなものが恵まれたことも、大きな喜びでありました。尚先生は大学は方法論を生命とし、従って大学生はその方法論を体得しなければ大学に学んだねうちがないのだという意味のことをよく言われました。このことは私の大学におけるデンケン（デンケン）の修業に、大きい刺戟となり又導きの星となりました」。

こうして大平は、晩年まで、杉村教授の著書を身辺から離すことがなかった。

さらにもう一つ、正芳の心を動かした講義があった。

「中山伊知郎助教授も、杉村先生と並んで学生の間には人気があった。恩師シュンペーターの流れを汲む新進の学究で、われわれは先生から経済原理の講義をきくことができた。やがてその内容は、常に変動する経済現象を観察する時、最も特質的なことはその相互の依存関係であり、経済理論の基本部分は、均衡理論のあらゆる形態からなるものであるから、経済学とは均衡理論で貫かれた一体系である」という立場をとられ、それが純粹経済学として結実したのである」。

正芳は、大学二年に進学すると、上田辰之助教授の本ゼミナールに参加することとした。

「上田先生は、経済学者というよりも、むしろ社会学者であり、社会学者である前に実のところ言語学者であられた。したがって、先生のトマス・アクイナスの研究その他のお仕事も、その言語学的な素養を抜きにしては考えられないものであった。ゼミナールは、たいてい吉祥寺の先生のお宅で行われた。R・H・トニーの『獲得社会』をテキストとして、彼の経済思想をというよりは、トニーの英文自体の言語社会的な解明を教わった。……私は先生から、きびしいしこきを通して言葉を大切にすることを教えられた」。

大平正芳のちに、政治家としては珍しく豊富な語彙を駆使し、独自の説得性とリズムを持つ文章を書い

たことは、人々の等しく指摘するところだが、この能力は、上田ゼミで大いに磨かれたものであったにちがいない。

このようにして、正芳は、杉村教授からは歴史と哲学の方法論を学び、中山助教からは経済学の基本を学び、そして、上田教授からはこれらの思想構築の根幹となる言語について学んだ。そのいずれもが、大平正芳という人物を形成する重要な要素であった。

商法講習所時代から算えれば、今日まで百十年余、一橋大学は、キャプテン・オブ・インダストリーの旗印のもとに、多くのすぐれた人材を実業界に送り出したが、政界、官界、学界、教育界等に進んで功績をあげた人も少なくなかった。そして、定員の少ない単科大学であっただけでなく、明治以来被ってきた度重なる圧迫もあつてか、同窓の結びつきは堅く、同期生でなくても助け合つのがこの大学のよき伝統となっている。大平は、「私はそのファミリイに仲間入りを許されたばかりに、どれだけ助かつたかわからない」と書いているが、事実、後年政界に出る彼は、一橋ファミリイから少なからざる支援を受けることになるのである。

その重要な一人が、明治四十三年（一九一〇年）卒業の加藤藤太郎である。もっとも、加藤は香川県立三豊中学校の第二回卒業生で、正芳にとっては中学の先輩にも当たる。

加藤は、東京高等商業学校（一橋大学の前身）卒業後、王子製紙に入社した。終戦時には副社長であつたが、GHQの追放に遭い、王子を退いた。追放が解除されるや、廃墟となつていた王子製紙神崎工場を再建し、神崎製紙を創立して、その初代社長となつた人物である。

太平は、学生時代から、日比谷の三信ビルにあつた王子製紙に加藤を訪ね、学生県人会に寄付を依頼するなどいくたびも接触して敬慕の念を強め、また加藤も正芳の人柄を愛し、二人はさながら親子のような関係に入つて行く。

大学へ入学して以後も、正芳はキリスト教と縁を絶つたわけではなく、もっぱら聖書への関心を深めた。大阪時代から、当時、無教会派の主要人物であつた矢内原忠雄（のち東京大学総長）の著作には特に傾倒しており、自由ヶ丘の矢内原邸を訪ねて「聖書研究会」に参加した。キリスト教社会主義者であつた賀川豊彦の門をたたいて聖書の講義を聴いたこともあつた。当時、一橋YMCAで一緒だつた友人の一人は、次のように語っている。

「知りあつてまもなく、大平君を賀川豊彦先生に紹介した。賀川先生の教会は当時京王線の松沢にあつたが、その日は府中の幼稚園で講話があつた。話は『山上の垂訓』だつた。講話が終わつてから大平君を紹介し、二人で賀川先生を駅まで見送つた。先生は改札を出てホームに達すると、暗闇の中で『大平くん』と彼の名を呼んだ。そして『お雑煮を食わずから正月にきたまえ』と、大きな声で彼に呼びかけられた。私の名でなく初めて会つた彼の名が呼ばれたことにジェラシーを感じたのが、先生の声が奇妙にはつきり耳に残っている」。

また、正芳は、この時期、金集めや人集めなどにおいてもなかなかの才を発揮している。昭和九年四月に決定された一橋YMCA寮の建設のための募金活動では、「私は、この建設のため趣意書をもつて、関東、関西各地の諸先輩を歴訪行脚した。幸いに一万五千円程度の醸金の確保に成功し、国立の木立ちの中に二階建の寮ができ上がつて、大堀さんという親切な信心深い寮母さんを迎えることができた」。

さらに、行政法の講義を担当した美濃部達吉教授が、昭和十年、その天皇機関説について国粹主義者の攻撃を受け、教壇を去ることになつたとき、正芳は受講していたもの（五人）だけでお別れ会をやるのはもつたないかと、大学の掲示板に、『美濃部博士と昼食を共にする会』というポスターを貼つて、食堂に入り切れないくらいの学生を集めたといふ。

正芳が大学生生活を送ったこの昭和十年前後は、日本軍の中国大陸への進出が着々と進み、やがて日中間の全面戦争へ発展した時期であつた。国内ではこれに呼応して、軍国主義化、戦時体制化が進行していた。だが、昭和初頭に破滅的な状態に陥っていた経済は、昭和六年の満州事変を契機に回復にむかい、輸出も増大し、重化学工業を中心に景気は活況を帯びつつあつた。また文化の面でも、都市化と大衆化が進み、新しい昭和 문화が形成されはじめていた。

正芳は、大学生活の中で、こうした文化を楽しんだが、その期間はまたたく間に終わり、学生にとっては就職問題という難関が近づいてきた。

「……心のどこかに『住友』に魅力を感じ、できれば住友にはいりたいという希望を持っていた。それとも、子供のころから、住友鉱山の四阪島製錬所の煙を見ながら学校へ通っていたし、住友財閥の発祥の地、別子銅山には、郷里の村からもたくさんの人が働きに行っていた。私が涉獵したキリスト教関係の本の多くが、矢内原、黒崎（幸吉）、江原（万里）の各先生のもので、そのいずれもが住友と縁のある方であつた。また当時私は、川田順氏の和歌や隨筆（とくに歴史物）が好きで、川田さんの二十数冊に及ぶ著書はほとんど読んでいた。その川田さんが住友の理事をしていたし、住友のことをよく書いておられたことなども、心理的に影響していたのかも知れない」。

一方、この頃は、中央官庁が新卒者の採用に当たって、東京帝国大学出身の法学士偏重から経済学部出身者に目をむけてきた時期でもあり、経済の分野を得意とする商大の学生が官吏の道をめざして、高等文官試験の関門にチャレンジするようになっていた。

中学入学時に将来の志望を『官吏』と書いたことのある正芳は、自分の周辺で、上級生や仲間が高等文官試験を受ける様子を見て、これを受験する志を立て、猛烈な勉強を開始した。

三年に進級する昭和十年の春、正芳の東京での抛り所であった前出の従兄大平秀雄が、駐在武官として中華民国へ赴任することになった。あとが夫人と子供だけになるので、正芳は国分寺の下宿を引き払い、中野にあつた秀雄の家に移り住んで、ここを卒業までの勉強の場とすることにした。

その年の五月には、商法研究のためヨーロッパに留学していた米谷隆三教授が帰国したので、正芳はその教えを受けた。同門の一人は言う。「米谷先生は気骨のある学者で、大平さんも慕っておりました。どういふきつかけか忘れましたが、米谷先生が、ある日、大平さんを評して、『実に大人物だ』と言ったのを聞いたことがあります」。

高等文官試験を受けたのは、その年の九月、発表は十月で、正芳は行政科に二桁番で合格した。このとき、高松高商出身の後輩全部が集まって正芳の合格祝勝会を行ったが、席上のあいさつで、正芳は「試験の答案は『薄化粧の女性』の如く謙虚に書くべきだ」と言った。あれも知っている、これも知っている」という具合に、ゴテゴテ書くと、結局化粧くすれで地肌が露出するという意味である。「薄化粧にしる厚化粧にしる、大平さんは、そんなにたくさん女性を知っているんですか」と参加者の一人が言つて、爆笑となつた。

また彼は、卒業した年の八月に発行された高松高商の同窓会誌に、後輩の受験希望者にむけて、「高等試験断想」と題する小文を寄せている。その中で、第一に、自分は官吏になるんだという意識を持つこと、第二に、経済科目を選んで自分の特長を伸ばすこと、第三に、日常経験を経済学の原則と関連して考える、いわば「生きた学問」をすることを強調している。

高等文官試験を通つた正芳は、奨学資金を受けてきた鎌田育英会の鎌田勝太郎（当時貴族院議員）のところに相談に行き、その紹介で十月頃、大蔵次官の津島寿一を訪ねた。

津島は、香川県坂出の人。一高、東大を卒業して、大蔵省に入り、エリート中のエリートとして、若くして頭角をあらわした。海外駐在財務官として活躍、理財局長から次官となり、このときは高橋是清蔵相に仕えていた。

正芳は、それまでにも、松平頼寿伯爵（高松藩主松平頼聡の長男、当時貴族院議員）が香川県出身の学生を小石川の広大な邸宅に招待したガーデンパーティーで津島と顔を合わせたり、また、津島が大蔵省財務官時代、大学に講演に来たとき、数人の香川出身の学生とともに津島と一緒に写真をとったりしたことはあったが、全く紹介なしで就職を依頼するほど親しい関係ではなかった。

のちに大平の記すところに従えば、その模様は次のとおりである。

然るべきところに紹介を頼むつもりでいた正芳に津島は、突然、

「君、大蔵省にこい」と言った。

「こいと言われますが、探ってくれるでしょうか。」

面くらった正芳がそう言うと、

「本曰ただいま、ここで採用してやる。ほかを受けないでよろしい」と津島は断言した。

正芳は、「しかし、私は東京商大ですから、大蔵省にはむかないのではありませんか」と言った。

「そんなことはない。大蔵省はいままで東大ばかりで、たまに京大が入るぐらいだ。どの事務官に何かを聞いても、返ってくる答えはみんな同じだ。これではいかん。ちがった血が必要だ。君、大蔵省に来たまえ。」

立身出世したものが、郷土の後輩に就職の道を開いてやる習慣がいまよりも強かったことは事実だが、それにしては大平正芳の入省の経緯が右の記述のとおりであるとしたら、津島の対応はかなり破天荒である。津島の殿様然とした態度が省内でまかりとおっていたためか、正芳については、すでに手をつくして調べた上、然るべき手続きをとってあったか、どちらかであろう。いずれにせよ、これで正芳の大蔵省入りが決まった。商大からは七年ぶりの入省である。

正芳は、早速郷里へ手紙をだして、家族のものに知らせた。それには「津島先生が会ってくれて、帰りに

は車までつけてもらった。天にも昇るほどうれしかった」と書いてあったという。

おそらく津島大蔵次官に会った直後のことと思われるが、大学が就職あっせんについて、学生に提出を求めている「人物調」という用紙に、正芳は次のように記入している。

まず、「就職志願先」については、『第一志望、官庁、第二志望、特殊銀行』としている。つまり、もし大蔵省に入れなかった場合にも、「日銀」その他の半官的な機関に入りたいという希望が表されており、この時正芳ははつきりと「官」を志していたことがわかる。ちなみにこの「人物調」によれば、身長は一六九糎、体重は六九斤、趣味は和楽、映画である。運動はテニス、陸上競技、ピンポン。そして、長所は快活ニシテ円満、素朴とあるが、短所は理智的判断ヨリモ感情ニオボレ易イと記されている。

これまで、折に触れ観察してきた正芳の性格という点からすると、この大学卒業時点での「感情ニオボレ易イ」という自評は、注目に値する。

正芳が、「職分社会と同業組合」と題する卒業論文の執筆に着手したのは、高等文官試験が終わり、大蔵省入省も内定して、しばらくしてのことである。「国家試験を終へてからの十月、十一月は気分の弛緩とテーマのとり方に煩はされて従らに低迷を続け少しも捗らなかつた。十二月に入って漸く倉皇として起草した」と、彼は論文の「小序」の末尾に記している。

卒論の内容は、『トニーの』『獲得社会』(The Acquisitive Society, 1921)を中世の聖トマス・アクィナスの政治経済哲学の現代版と見、自由競争も階級闘争も、ともに社会を混乱に陥れてゐる現在、『この対立を止揚せる全体、分裂を克服する統一、闘争を超えた調和が要望されるのは、歴史の必然の歩み』であるとし、同時に、現実的な関心として、当時、世界各国で進展しつつあった産業統制の動向に着眼して、同業組合を「国家と個人とを媒体する組織」としてとらえる見方を打ち出したものである。

学士試験に合格した正芳の成績は三年間で優が二十六、良が七、可はゼロ。卒論の評点は優である。

正芳は、もはや、三年余り前、大阪の桃谷順天館にとめながら、友人に悶々たる手紙を送った彼ではなかった。聖書を通じてキリスト教への理解は深めていたにしても、布教運動に引きずりまわされる彼でもなくなっていた。彼は、よき師にめぐり会って学問の深遠を学び、さまざまな出身背景の友人と接して友情を培い、また同時に大都會の混濁と活力に触れつつ、その個性を豊かにし、社会への視野を広げていたのである。